



何が過去のいじめ体験からのPTGを導くのか : テキストマイニングによるPTGの検討

長田, 真人
相澤, 直樹

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 18:14-20

(Issue Date)

2019-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81011697>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011697>



何が過去のいじめ体験からのPTGを導くのか —テキストマイニングによるPTGの検討—

What progress PTG from past bullying
: Study of PTG by text mining

長田 真人* 相澤 直樹**
Makoto OSADA* Naoki AIZAWA**

要約:多くの大学生が小中学校を通していじめ被害体験をしていることがわかっている。いじめ被害体験は、身体的な症状から精神的な症状まで多くの影響を与えており、その影響は長期的にもネガティブな影響を与えている。一方で、いじめ被害体験には、長期的影響として、肯定的な意味づけの側面がある。本研究では、肯定的な意味づけとしてPTGを用いて、過去のいじめ体験に関する調査を行い、いじめ被害体験と肯定的な意味づけの関係、いじめ被害体験における肯定的な意味づけの特徴について検討を行った。調査協力者の大学生111名に対し、質問紙による調査を行った。PTG高群・中群・低群の3群に対する分散分析の結果から、ある程度以上のいじめ被害体験した青年において、PTGを感じやすい群がいることが確認された。自由記述については、いじめ被害体験からの学びに関するテキストマイニングの結果から、PTGIの大小に関係なく「人」という記述との共起関係がみられた。また、いじめ被害体験の際に支えになったことに関する自由記述においても、友人や親などソーシャルサポートの必要性が示唆され、いじめ体験後の人間関係における積極的な関わりが重要であることが示唆された。以上の結果から、いじめ被害者に対する長期的支援として、PTGを促すために、対人関係に注目した支援を行う有効性が示唆された。

問題・目的

いじめとは

いじめは、大学生の8割ほどが関係してきたことが明らかになっている等、今日多くの若者たちが体験をしてきており、また、その中の2-3割はいじめ被害体験をしていることが明らかになっている(森田・滝・秦・星野・若井, 1999)。2017年度には、いじめの認知件数は414,378件となり(文部科学省, 2018)、調査方法の変化もあるが、近年での大幅な上昇が知られている。本研究においては、『「いじめ」とは、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。」とする。』とした文部科学省の定義に従い、研究を進めていきたいと考えている(文部科学省, 2008)。

いじめ被害体験は、身体的な症状から精神的な症状まで多くの影響を内在化・外在化問題として与えている(村山他, 2015)。Le et al.(2017)によれば、ベトナムのいじめをよく受けていた生徒はそうでないものに比べ、高い抑うつや精神的ストレスを感じている。同様の結果は日本でも示されており、いじめ被害者の不機嫌・怒りや無気力のストレス反応が高いことを明らかになっている(岡安・高山, 2000)。

また、いじめ被害体験は長期的にもネガティブな影響を与えていることが知られている(Staubli & Killias, 2011)。Storch et al. (2004)によれば、過去のからかわれた経験が大学生の抑うつや不安、孤独感に関連することが示されている。また、水谷・雨宮(2015)も日本の大学生に対する調査から、いじめ被害体験が直接的に、自尊感情を介して間接的に影響し、Well-beingを低下させていることを示している。こうした長期的なネガティブな影響に関連する要因の1つとして、意味づけが考えられる。寺井・石村(2016)は、いじめ被害体験時の感情と大学生時のPTSD症状の関連性を示し、特に自己卑下のようなネガティブな意味づけを行うことでトラウマ症状と否定的な認知変容につながることを示している。

いじめ体験の肯定的意味づけ

一方で、いじめ被害体験には、長期的影響として、肯定的な意味づけの側面がある。坂西(1995)は大学生期においてもいじめの影響があることを示唆し、いじめの長期的な影響として、いじめにより消極的な影響だけでなく、高い共感性や我慢強さなどといった積極的な影響もみられることを示している。また、香取(1999)は大学生への調査から、いじめのプラスの影響として他者尊重、精神的強さ、進路選択への影響の3つを挙げている。

このように、いじめにはその長期的な影響として、肯定的な側面と

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程
** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

2018年11月30日 受付
2019年1月31日 受理

否定的な側面の両面がある。一方で、長期的な影響の形成過程に関する検討はほとんど行われておらず、特に肯定的な意味づけの側面に注目した研究は少ない。そこで、本研究では過去のいじめ被害体験に関する調査を行い、いじめ被害体験と肯定的な意味づけの関係について検討を行う。また、先行研究では、小学校と中学校ではいじめの構造が異なることが示されており(橋本, 1999), それぞれのいじめ被害体験からの影響も異なる可能性がある。そこで、本研究では、小学校と中学校の2つの時期について過去のいじめ体験に関する質問を行い、両時期におけるいじめ被害体験の関係を検討する。一方で、高校におけるいじめ被害体験については、体験からの経過期間が短い可能性があることも考慮し、倫理的配慮から、選択肢から外した。

体験の肯定的な意味づけとしての PTG

本研究では、いじめ体験に関する肯定的な意味づけとして、Post Traumatic Growth(心的外傷後成長, 以下 PTG とする)を検討する。PTG とは、危機的な出来事や困難な経験における精神的なものがきや戦いの結果生じるポジティブな心理的変容の体験である(Tedeschi & Calhoun, 1996)。その形成過程は Tedeschi & Calhoun(1996)によるモデルが示されており、トラウマ体験により揺るがされた個人の世界に対する基本的な信念を、いくつかの認知的活動により再構成するプロセスの結果として、成長を知覚することが知られている。一方で、PTG の発生メカニズムはストレス体験領域によって異なることが示唆されており(Tedeschi & Calhoun, 2004), いじめについての検討はほとんど行われていない。PTG は、死別経験からの人格的発達(渡辺・岡本, 2005)や被虐待の経験がもたらした有益性の発見(McMillen, Zuravin, & Rideout, 1995)といった比較的軽度でネガティブな出来事からの精神的成長が中心に扱われてきたが、日常場面で頻繁に経験する学業や対人関係の悪化などの些細でネガティブな出来事からの精神的成長を扱った研究も見られる(Park, Cohen, & Murch, 1996)。そこで、本研究では、自由記述からいじめ体験における PTG の形成について検討を行う。いじめ体験において PTG を検討する利点は、いじめの肯定的な意味づけに関する研究に PTG の知見を応用できることであると考えている。いじめの肯定的な意味づけに関する研究は、先行研究も少なく知見が統一されていないが、PTG については多くの統一的な知見が蓄積されている。例えば、PTG を促す要因としては、ソーシャルサポート(Calhoun & Tedeschi, 1998)・自己開示(林・市井・宅・富永, 2015), などが知られており、いじめ被害体験においても同様の要因が影響を与えることが想定される。本研究においては、PTG に関する知見を参考にしながら、いじめ被害者への援助に関わる新たな知見を探索する。いじめ被害者への援助については、いじめ被害からの回復だけではなく、いじめ被害体験の肯定的な意味づけに関わる援助の重要性が示唆されている。三島(2015)によれば、中学時代の排斥体験は高校生の抑うつを促進するが、それとは独立に将来展望が低下しており、排斥に関する支援とは別に、将来展望を回復させるための支援の重要性が示されている。

目的

本研究の目的は、以下の2点である。1点目は、過去のいじめ体験に関する調査を行い、いじめ体験と PTG の関係について検討を行うことである。2点目は、自由記述からいじめ体験における肯定的

な意味づけの形成について検討を行うことである。以上2点の検討から、いじめ被害者への援助に関する新たな視点の導入にむけた検討を行いたいと考えている。

方法

調査概要

以下のような手続きで質問紙による調査を行った。質問紙調査は、教員の同意のもと、大学の講義の時間を使い、一斉配布式による調査を行った。調査時期は2016/4月~7月であった。

いじめに関する質問は倫理面への配慮が必要であるといえ、調査を始める前に研究の主旨と質問紙の保存方法、データの処理について説明し、質問紙はいつでも不利益なくやめることができることを伝えた。加えて、連絡先といじめを想起することでおこる問題について簡易に説明した用紙を配布した。本研究においては、神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究倫理審査委員会の承認のもと、調査を行った(受付番号 No.177)。

調査協力者・内容

調査協力者は、関西地区の大学の大学生127名のうち、欠損値を除いた111名(男32, 女72, その他7), 平均年齢18.65歳(0.89)であった。有効回答率は、87.40%であった。調査内容は、自由記述を含む以下の3点である。

A. いじめ体験に関する調査

いじめを実際にどの程度体験してきたのかを、回顧的に質問した。体験時期(小学校・中学校)、体験内容(身体的いじめ・関係的いじめ・言語的いじめ)、体験立場(被害者・傍観者)、体験影響(身体的影響、精神的影響、学校の欠席)について尋ねる質問を独自に作成した(水谷・雨宮(2015)参考)。本研究においては、研究目的から、体験内容・体験影響における区別を行わず、体験立場は被害者のみとした。

B. 心的外傷後成長を測定する尺度: PTGI-J

Taku et al.(2007)により作成された、Tedeschi & Calhoun(1996)による「Post traumatic Growth Inventory ; PTGI」をもとに作成された心的外傷後の成長尺度の邦訳版である。外傷後の成長では、危機的な出来事の結果、どの程度心理的な成長が生じたかについて以下の5つの領域から測定される。第1は、「他者との関係性」であり、人に対してより思いやりの心を持つようになるなどの変容が含まれる。第2は、「新たな可能性」であり、その体験なしではありえなかった新しい道筋が出てくるといった変容が含まれる。第3は、「人間としての強さ」であり、出来事後の苦悩やものがきの過程で、自分に対する自信が出てきたり自分の強さを実感するような変容が含まれる。第4は、「精神的変容」であり、スピリチュアルな事柄への理解の深まりや、信仰心が強まるといった宗教上の変容に関する体験が含まれる。第5は、「人生に関する感謝」であり、命の大切さや日々の尊さに対する気づきが含まれる。日本語版では、Tedeschi & Calhoun(1996)のPTGIを構成する21項目について、邦訳後312名の大学生に調査を実施し、原版では5因子構造であったが、「精神的変容」、「人生に対する感謝」が分離されず(Taku et al., 2007), 18項目4因子構造が確認された。

C. いじめ体験に対する自由記述 7項目

いじめに対する考え方、対処、意味づけ、学んだこと、態度、支

Table1 調査項目の記述統計・相関分析

	平均	S.D.	項目数	α	小学いじめ影響	中学いじめ被害	中学いじめ影響	PTG	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ	精神的変容及び人生に関する感謝
小学いじめ被害	3.39	3.08	3	.81	.70**	.54**	.49**	.37**	.31**	.41**	.34**	.26**
小学いじめ影響	1.61	2.41	3	.78	1	.49**	.69**	.26**	.18	.33**	.28**	.18
中学いじめ被害	2.06	2.98	3	.82		1	.76**	.26**	.15	.38**	.24*	.19*
中学いじめ影響	1.29	2.39	3	.86			1	.27**	.17	.37**	.27**	.22**
PTG	46.19	20.77	18	.95				1	.92**	.91**	.90**	.91**
他者との関係	16.69	7.78	6	.90					1	.75**	.73**	.77**
新たな可能性	10.42	5.50	4	.85						1	.80**	.81**
人間としての強さ	10.32	5.01	4	.86							1	.78**
精神的変容及び人生に関する感謝	8.75	4.53	4	.79								1

$p<.05$ * $p<.01$ **

えになったこと、乗り越えるためには、の7点について、文章を完成させる自由記述の形式で回答してもらった。本研究においては、研究目的から、いじめの体験から学んだことは・いじめられている時、支えになるのは・いじめ体験を乗り越えるには、の3文に続く自由記述について分析を行った。

分析

分析は、各項目についての量的な分析を行ったのち、自由記述の分析を行った。分析には、SPSS(Ver21)・KH-Coder(樋口, 2014)を使用した。

結果

量データの分析

量データの分析を行った。記述統計・相関分析の結果は以下のとおりである(Table1)。各いじめ被害体験・影響とPTGについては、有意な弱い正の相関がみられた($p<.01$)。

まず、PTGの傾向を明らかにするために、PTGIの4下位尺度を使い、Ward法(平方ユークリッド距離)による階層クラスター分析を行った。人数のバランスから、3群が妥当であると判断し、以下のように分類した(Figure1)。その後、3群に対して、PTGIの4下位因子を目的変数とした1要因分散分析を行った(Table2)。結果から、第1群は、PTGI得点が平均的であるため、PTG中群と命名した。第2群は、PTGI得点が他2群より低いため、PTG低群と命名した。第3群は、PTGI得点が他2群より高いため、PTG高群と命名した。

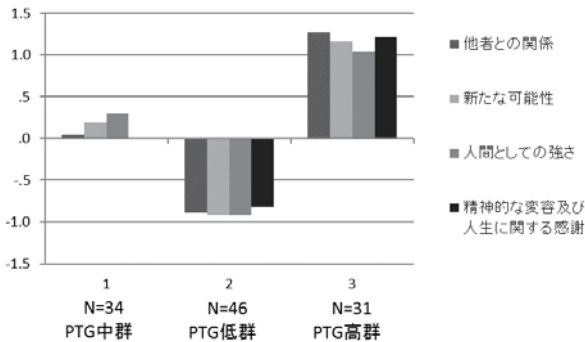


Figure1 各群間のPTGI下位因子のZ得点による比較

次に、3群に対して、いじめ体験に関する各項目を目的変数とした1要因分散分析を行った(Table2)。結果から、全ての項目において有意な結果が得られた($F(2,108)$, $p<.05\sim.001$)。Tukeyのbによる多重比較に結果から、小学いじめ被害・中学いじめ被害・中学いじめ影響についてはPTG中・高群がPTG低群に比べて有意に高いことが示された。一方で、小学いじめ影響については、PTG中群がPTG低群に比べて有意に高いことが示されたが、PTG高群は有意差が見られなかった。

Table2 各群における1要因分散分析

	1 PTG中群 N=34	2 PTG低群 N=46	3 PTG高群 N=31	F (2,108)	多重比較 ($p<.05$)
小学いじめ被害	4.26 (2.94)	2.02 (2.04)	4.45 (3.78)	8.83***	3, 1>2
小学いじめ影響	2.29 (3.02)	0.85 (1.59)	2.00 (2.41)	4.70*	1>2
中学いじめ被害	2.79 (3.08)	1.07 (1.84)	2.74 (3.79)	4.34*	1, 3>2
中学いじめ影響	1.76 (2.83)	0.48 (1.46)	1.97 (2.69)	4.89**	3, 1>2
PTG	49.06 (6.75)	25.89 (6.45)	73.16 (8.75)	397.63**	3>1>2
他者との関係	17.03 (3.57)	9.78 (3.60)	26.58 (3.76)	198.05**	3>1>2
新たな可能性	11.47 (3.26)	5.35 (1.86)	16.81 (3.37)	158.31**	3>1>2
人間としての強さ	11.79 (3.65)	5.74 (2.07)	15.52 (2.89)	114.84**	3>1>2
精神的変容及び人生に関する感謝	8.76 (2.52)	5.02 (1.73)	14.26 (3.35)	125.27**	3>1>2

$p<.05$ * $p<.01$ ** $p<.001$ ***

自由記述の分析

続いて、自由記述に関する分析を行った。各設問に対し、共起ネットワーク分析を作成した。共起ネットワーク分析は、自由記述から取り出した抽出語に対し、出現パターンが似通ったものを直線関係で結び、共起関係を示すネットワーク図を描く分析である(樋口, 2014)。また、本研究においては、共起ネットワーク分析で示される抽出語同士の関係に加えて、外部変数であるクラスター分析におけるグループ変数を加え、ネットワーク図を作成した。

まず、いじめ体験からの学びに関する自由記述を処理し、327の構成要素を得た。その中からキーワードを整理し、キーワード(22個)と各クラスター3群を基に、共起ネットワークを行った(Figure2)。結果から、すべての群において、「人」と共起関係がみられた。また、PTG低・中群においては「嫌」・「苦しい」といった記述と、PTG中・高群においては「やり返す」・「気持ち」・「大切」といった記述と、PTG低・高群においては「人間」・「目立つ」・「弱い」といった記述と共起関係がみられた。各群においては、PTG低群では「関係」・「忘れる」といった記述と、PTG高群では「周り」・「認識」といった記述との関係がみられた。

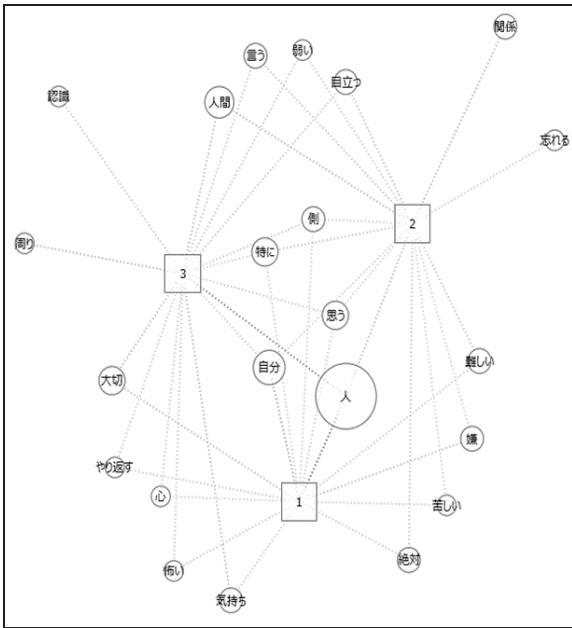


Figure2 各群といじめ体験からの学びに関する自由記述の共起ネットワーク
注: 図の線は共起関係を示し、その太さは関係の強さを示す。また、丸は抽出語を、四角は外部変数であるクラスターのグループ変数を示し、その大きさは出現数の多さを示している。

次に、いじめ体験の際に支えになったことに関する自由記述を処理し、237の構成要素を得た。その中からキーワードを整理し、キーワード(22個)と各クラスター3群を基に、共起ネットワーク分析を行った(Figure3)。結果から、すべての群において、「親」・「友人」・「家族」・「自分」と共起関係がみられた。また、PTG中・低群においては「周り」・「相談」といった記述と、PTG中・高群においては「先生」といった記述と、PTG低・高群においては「好き」・「級友」といった記述と共起関係がみられた。

最後に、いじめ体験を乗り越えることに関する自由記述を処理し、393の構成要素を得た。その中からキーワードを整理し、キーワード(45個)と各クラスター3群を基に、共起ネットワーク分析を行った(Figure4)。結果から、すべての群において、「必要」・「強い」・「自分」・「相談」と共起関係がみられた。また、PTG中・低群においては「友人」・「時間」・「逃げる」といった記述と、PTG中・高群においては「誰か」・「忘れる」といった記述と共起関係がみられた。各群においては、PTG中群では「相手」・「意思」とい

た記述と、PTG低群では「認める」・「関係」といった記述と、PTG高群では「精神」・「味方」といった記述との関係がみられた。

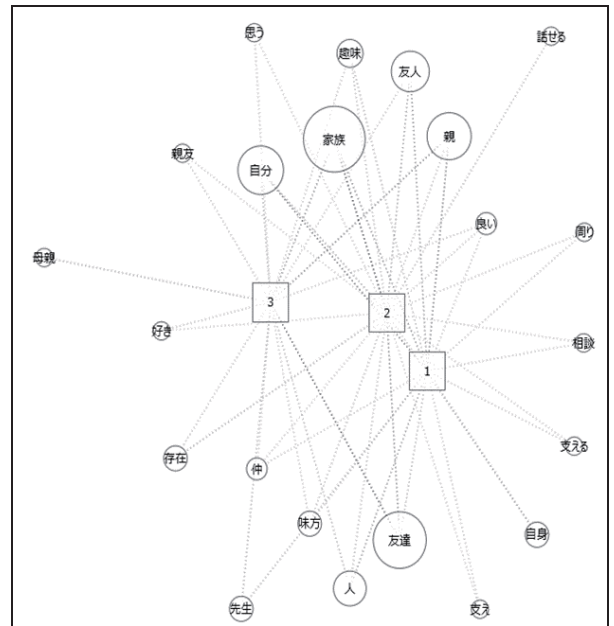


Figure3 各群といじめ体験の際に支えになったことに関する自由記述の共起ネットワーク
注: 図の線は共起関係を示し、その太さは関係の強さを示す。また、丸は抽出語を、四角は外部変数であるクラスターのグループ変数を示し、その大きさは出現数の多さを示している。

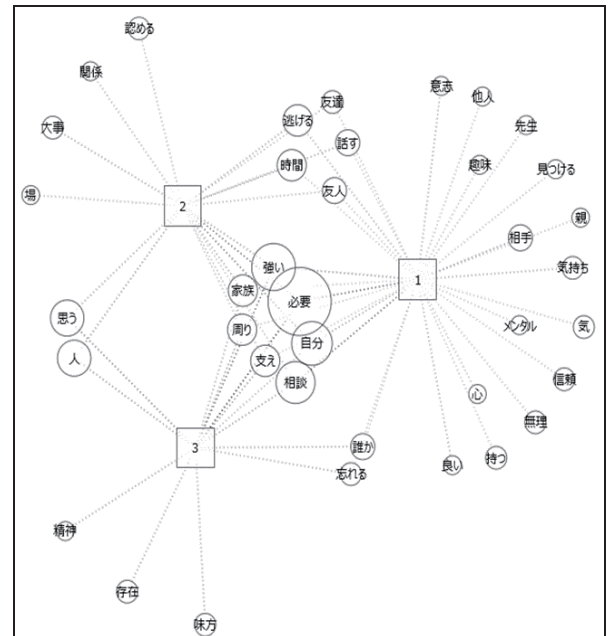


Figure4 各群といじめ体験を乗り越えることに関する自由記述の共起ネットワーク
注: 図の線は共起関係を示し、その太さは関係の強さを示す。また、丸は抽出語を、四角は外部変数であるクラスターのグループ変数を示し、その大きさは出現数の多さを示している。

考察

本研究の目的

本研究の目的は以下の2点であった。1点目は、過去のいじめ体験に関する調査を行い、いじめ体験とPTGの関係について検討を行うことである。2点目は、自由記述からいじめ体験におけるPTGの形成について検討を行うことである。

以上2点の検討後、いじめ被害者への援助に関する新たな視点の導入にむけた検討を行う。

いじめ被害体験とPTGIについて

まず、相関分析の結果から、いじめ被害体験とPTGIは有意な弱い正の相関が確認された。この結果から、単にトラウマ体験をするだけでPTGが起こるわけではないと考えられる。近年、PTG研究においては出来事中心性が注目され、自分の人生においてある程度重大である体験をすることがPTGに必要なのではないかと考えられる(Grolesu, Calhoun, Cann, & Tedeschi, 2013)。また、Cann et al.(2010)は、トラウマ体験により世界に対する基本的な信念である中核的信念(Core Belief)が変化することで、PTGが促進されることを示している。このように、トラウマ体験に対する認知の個人差がPTGに影響を与えており、本研究でも同様の知見を確認できたと考えられる。

次に、各クラスター群における分散分析の結果から、いじめ被害体験についてPTG中群高群は小中学校でいじめ被害を受けていることが示された。一方、同程度のいじめ被害を体験した2群間で、PTGについてはPTG高群がPTG中群に比べて高いことが示された。この結果から、一定程度以上のいじめ被害体験した青年において、PTGをより感じやすい群がいることが考えられる。PTGは体験しただけで起こるものではなく、いくつかの認知的活動により個人の世界に対する基本的な信念を再構成するプロセスの結果であることが知られている(Tedeschi & Calhoun, 1996)。例えば、ポジティブな変化には肯定的な意味の付与が重要であることが示唆されており(岩野・樋町・橋本・坂野,2007)、いじめ被害者への支援においても、回復だけではなく意味づけについての支援が必要であると考えられる。

以上の結果から、いじめ被害体験における長期的な影響について、肯定的な意味づけをPTGの枠組みで解釈することで、トラウマに関する認知の個人差とPTGが関係していること、一定程度の体験をしたものの中にPTGを感じやすいものがあることが、いじめ被害者においても示された。一方で、PTG研究におけるモデルをいじめ被害体験にも同様に当てはめて良いかについては、検討が必要である。なぜなら、PTGの発生メカニズムはストレス体験領域によって異なること(Tedeschi & Calhoun, 2004)の原因がトラウマ体験の質にあるとも考えられるからである。いじめは単回性のトラウマ体験とは異なり、臨床的なケアの対象として取り上げる比較的軽度の出来事ではないが、反復的に繰り返されるつらい出来事であるため、人の心にスキーマを形成しネガティブな影響を及ぼしている可能性がある(小田部・加藤,2007)。小田部(2008)は、こうした対人関係に関わる心の傷を「日常型心の傷」と表し、ネガティブな感情を伴う苦痛な体験であり、それが記憶に内在化されその後の認知や行動に

ネガティブな影響を与えるという点において、単回性トラウマや長期反復性トラウマと類似していることを示している。このように、トラウマ体験の質からの再検討も必要であると考えられる。

いじめ体験に関する自由記述の分析について

まず、いじめ被害体験における学びについては、PTGIの大小に関係なく「人」という記述との共起関係がみられ、PTGIにおける他者との関係のように、いじめ被害という体験は人間関係に関する学びが起りやすいことが確認された。先行研究においても同様の結果が得られており、同調傾向や他者評価への過敏性というマイナス面だけでなく、他者尊重といったプラスの影響も確認されている(香取, 1999)。また、いじめ体験の際に支えになったことに関する自由記述においても、友人や親などソーシャルサポートの必要性が示唆されている。先行研究において、ソーシャルサポートがPTGを促すことは確認されており(Calhoun & Tedeschi,1998)、本研究も同様の結果を示したといえる。この結果から、いじめ体験後の人間関係における積極的な関わりが重要であることが示唆される。同様の指摘は、いじめについても行われており、亀田・相良(2011)は、インタビュー調査から、いじめられた体験を通して自己成長感を自覚している群では、自己開示からのソーシャルサポートを得ること、さらに、支えてくれる重要な他者の存在があることが示している。次に、いじめ被害体験を乗り越えるには、という質問に対し、上記2つの記述と同様に「周り」・「相談」といった人間関係に関する記述が多いことに加えて、PTG中・高群のPTGがみられた群において「忘れる」といった対処がみられた。いじめに関する研究においては、積極的な対処がいじめのプラスの影響を高めることが示されている(森本, 2004)、この結果は先行研究と異なる。一方で、小早川・杉浦・石田(2015)は、いじめ被害者支援に関する尺度作成を行い、PTGを目的変数とした重回帰分析では他の支援方法との関係から関連が見られないが、いじめ被害者の気を紛らわすような居場所づくりがPTGIの下位因子である他者との関係・新たな可能性・精神的変容及び人生に関する感謝と正の有意な相関を示すことを明らかにしている。本研究における結果は、段階的にとらえることができる。Herman(1992)によるPTSDからの回復過程の3段階から考えると、「忘れる」といった対処行動は第1段階の安全の確立と考えられ、「相談」といった対処行動は第2段階の回想と服喪追悼に当たると考えられる。このように、統計的には積極的な対処が有意な結果を示すが、その前段階としていじめのない環境を確保することも必要であると考えられる。

以上の結果から、いじめ被害体験における長期的な影響において、PTGを促すために対人関係問題に注目した支援を行う有効性が示唆されたといえる。一方で、いじめ体験からPTGを形成するまでの過程をより詳細に行う必要がある。PTSDの症状とPTGは共存していることは確認されており(Shakespeare-Finch & Lurie-Beck, 2014)、トラウマ体験からの回復と肯定的意味づけの双方に配慮した支援が求められる。

いじめ被害者への援助に関する新たな視点の導入にむけた検討と課題

本研究の結果から、いじめ被害体験における長期的な影響において、肯定的な意味づけをPTGの枠組みで解釈することは有効であり、PTGを促すために対人関係問題に注目した支援を行う有効性が示

唆された。これまでのいじめ被害者援助は、長期的影響に注目できておらず、また、肯定的意味づけを促す援助も注目されていなかったといえる。本研究では、いじめ被害者に対し、長期的な展望を持ち、肯定的な意味づけを促す対人援助の有効性を示唆された。また、いじめ体験への積極的対処だけでなく、安全な環境を確保することも肯定的意味づけに関連する可能性が示されたと考えている。

一方で、多くの課題がある。まず、本研究は回顧的な手法を使った横断研究である。過去のいじめ体験について正確に思い出しているかについては疑問がある。回顧的な調査は調査協力者のいじめからの時間経過に伴う誤差などの問題点がある(神村・向井, 1998)。また、調査協力者が 111 名と少なく、大学生のみを対象としていることから、より一般的な調査が求められる。以上のような研究方法の問題に加え、実際的な問題として、PTSD の症状と PTG の双方に配慮する必要がある。本研究においては検討を行っていないが、いじめ被害体験は長期的に well-being に悪影響を与えている(Staubli & Killias, 2011)。武井他(2011)にあるように、出来事からの影響のネガティブな面とポジティブな面の双方を認知することが重要性であり、本研究では課題であった。

最後に、肯定的な意味づけや PTG がもつ、研究的な意味において確認しておきたい。本研究は、いじめ被害体験が長期的に影響を与えており、その援助のあり方について新たな視点を導入することを目的とした研究である。その際に、肯定的意味づけや PTG の視点を参考にすることで、多くの示唆が得られた。一方で、肯定的意味づけや PTG が促されたといって、トラウマの症状がなくなるわけではない。PTG に関する先行研究から、ネガティブな変化はポジティブな変化よりも影響が大きいことが確認されている(Frazier, Conlon & Glaser, 2001)。また、戸田(1997)は、いじめ体験からの成長があることは、いじめられた個人の認知の変化によるものであり、いじめのそのものによる結果ではないことを強調し、いじめの長期的な影響としての成長はいじめがあることが許される根拠にはならないことを指摘している。本研究も同様の立場から、いじめ被害者への支援の可能性の検討を行った。

引用文献

Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Yamamoto, K., Kishimoto, J., Miyake, Y., & Nishizono-Maher, A. (2002). Reliability and validity of the Japanese-language version of the impact of event scale-revised (IES-R-J): four studies of different traumatic events. *The Journal of nervous and mental disease*, **190**, 175-182.

坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, **11**, 105-115.

Calhoun, L.G. & Tedeschi, R.G. (1998). Beyond recovery from trauma: Implications for clinical practice and research. *Journal of Social Issues*, **54**, 357-371.

Cann, A., Calhoun, L.G., Tedeschi, R.G., Kilmer, R.P., Gil-Rivas, V., Vishnevsky, T., & Danhauer, S.C. (2010). The core belief inventory: A brief measure of disruption in the assumptive

world. *Anxiety, Stress & Coping*, **23**, 19-34.

Frazier, P., Conlon, A., & Glaser, T. (2001). Positive and Negative Life Change Following Sexual Assault. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **69**, 1048-1055.

Groleau, J.M., Calhoun, L.G., Cann, A., & Tedeschi, R.G. (2013). The Role of Centrality of Events in Posttraumatic Distress and Posttraumatic Growth. *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy*, **5**, 477-483.

林 麻由・市井雅哉・宅 香菜子・富永良喜 (2015). 外傷体験についての思考・自己開示・聞き手の応答がトラウマ反応および外傷後成長に及ぼす影響 ト라우マティック・ストレス, **13**, 51-59.

橋本撰子 (1999). いじめ集団の類型化とその変容過程—傍観者に着目して— 教育社会学研究, **64**, 123-142.

Herman, J.L. (1992). *Trauma and Recovery*: HaperGollins, New York. (中井久夫(訳) (1999). 心的外傷と成長 みすず書房.)

樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析・内容分析の継承と発展を目指して・株式会社ナカニシヤ出版.

岩切昌宏 (2014). いじめ対応とトラウマケア 学校危機とメンタルケア, **6**, 53-62.

岩野 卓・樋町美華・橋本忠行・坂野雄二 (2007). 心理的な成長を促す出来事に関する検討 日本行動療法学会大会発表論文集, **33**, 318-319.

亀田秀子・相良順子 (2011). 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討 カウンセリング研究, **44**, 277-287.

香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, **32**, 1-13.

小早川茄捺・杉村和美・石田 弓 (2015). いじめられた体験を通じた自己成長感を促す他者からの支援 広島大学心理学研究, **15**, 147-162

Le, H., Nguyen, H., Campbell, M., Gatton, M., Tran, N., & Dunne, M. (2017). Longitudinal associations between bullying and mental health among adolescents in Vietnam. *International Journal of Public Health*, **62**, 51-61.

McMillen, C., Zuravin, S., Rideout, G. (1995). Perceived benefit from child sexual abuse. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **6**, 1037-1043.

三島浩路 (2015). 仲間からの排斥が将来展望に及ぼす影響 現代教育学部紀, **7**, 13-20.

水谷聡秀・雨宮俊彦 (2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響 教育心理学研究, **63**, 102-110.

文部科学省 (2008). 「いじめ問題への取り組み状況に関する緊急調査」結果 文部科学省 2011 年 1 月 20 日 <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/1301743.htm> (2019 年 1 月 15 日)

文部科学省 (2018). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果(平成 29 年度) 文部科学省 2018 年

10月25日

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400304&kikan=00400&tstat=000001112655&cycle=0&tclass1=000001120595&tclass2=000001120695&tclass3=000001120697&result_page=1&second=1&second2=1>

(2019年1月15日)

- 森本幸子 (2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究. *心理臨床学研究*, **22**, 441-446.
- 森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・若井弥一 (1999). 日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集 金子書房
- 村山恭朗・伊藤大幸・浜田 恵・中島俊思・野田 航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井正次 (2015). いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性. *発達心理学研究*, **26**, 13-22.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス. *教育心理学研究*, **48**, 410-421.
- 小田部貴子 (2008). 対人関係の中ででの「日常型心の傷」—歪められていく自己像/他者像— *教育と医学*, **56**, 426-433.
- 小田部貴子・加藤和生 (2007). 反復性のつらい体験によって形成される「心の傷スキーマ」の実証的研究: 閾下感情プライミングパラダイムを用いて. *パーソナリティ研究*, **16**, 25-35.
- Park, C.L., Cohen, L.H., & Murch, R.L. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, **64**, 71-105.
- Shakespeare-Finch, J. & Lurie-Beck, J. (2014). A meta-analytic clarification of the relationship between posttraumatic growth and symptoms of posttraumatic distress disorder. *Journal of Anxiety Disorders*, **28**, 223-229.
- Staubli, S. & Killias, M. (2011). Long-term outcomes of passive bullying during childhood: Suicide attempts, victimization and offending. *European Journal of Criminology*, **8**, 377-385.
- Storch, E.A., Roth, D.A., Coles, M.E., Heimberg, R.G., Bravata, E.A., & Moser, J. (2004). The measurement and impact of childhood teasing in a sample of young adults. *Journal of Anxiety Disorders*, **18**, 681-694.
- Taku, K., Calhoun, L.G., Tedeschi, R.G., Gri-Rivas, V., Kilmer, R.P., & Cann, A. (2007). Examining Posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety, Stress and Coping*, **20**, 353-367.
- Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455-471.
- Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G. (2004). Posttraumatic Growth: Conceptual Foundations and Empirical Evidence. *Psychological Inquiry*, **15**, 1-18.
- 寺井治樹・石村郁夫 (2016). 過去のいじめ体験による心的外傷体験と否定的認知の変容に関する調査. *東京成徳大学心理学研究*, **16**, 181-192.
- 戸田有一 (1997). 教育学部学生のいじめ・いじめられ経験といじめに対する意識. *鳥取大学教育学部教育実践研究指導センター研究年報*, **6**, 19-28.

渡辺照美・岡本祐子 (2005). 死別経験による人格的発達とケア体験との関連. *発達心理学研究*, **16**, 247-256.

付記

本論文は、平成30年度第82回日本心理学会で発表されたものを、一部修正したものです。本研究に協力して下さいました皆さまに、深く感謝申し上げます。